

幼児の社会的・感情的発達に関する研究（Ⅱ）

——社会的発達を中心に——

松田君彦・大坪治彦・島田俊秀

(1984年10月15日 受理)

Research on the Social and Emotional Development
of Young Children (II): Social Development

Kimihiko MATSUDA, Haruhiko OHTSUBO and Toshihide SHIMADA

はじめに

個人がその社会のメンバーとなるための知識や技能を習得していく過程を社会化と呼ぶが、この中には、社会がどのようにして個人をそのメンバーにつくり上げていくかという側面と、個人がどのようにして社会のメンバーとなっていくかという側面とが含まれている。

しかし、いずれにせよ具体的には、この社会化の過程は、その個人が所属したり関係をもったりする集団や人間関係の中で進行するわけであり、こうした集団や組織は「社会化のエージェント(担い手)」と呼ばれる。社会化のエージェントは、いわば社会の代理人として、ひとりひとりの個人に働きかける機能をもっている。そして、家族や交友関係、地域社会、保育園、幼稚園・学校などの教育機関、マス・メディアなどは重要な社会化のエージェントである。

また、一方子どもの社会性の発達にとっては、垂直的構造における社会化と水平的構造における社会化が不可欠とされているが、親や教師の指導を媒介とする家庭や学校は前者の代表的な例であり、学校や地域社会での仲間関係は後者の代表的な例である。ことに幼児期は、対人関係や社会性の発達という点から考えた場合、それが縦型から横型へと移行し始める重要な時期に相当している。

そこでここでは、家庭および保育園、幼稚園における子どもの社会的行動を、対大人関係、対子ども関係という視点から分析することによって、子どもの対人関係や社会性の発達過程を調べてみた。

また、社会化の対象である子どもが幼少であればあるほど、垂直的構造における社会化、つまり親や教師の与える社会化の影響は大きい。同一の子どもに対して、この両者はある時には同じように、またある時には異なったように働きかけるだろうし、また、子どもの行動に対する判断や評価の仕方も異なっている。子どもの社会化を考える場合、この両者の間に見られるズレは、決して無視し得ない重要な意味をもつと思われるので、この点も併せて考えてみたい。

調査方法

調査は質問紙形式によって実施したが、調査目的、方法、対象、期日等については、前掲の論文(『幼児の社会的・感情的発達に関する研究(Ⅰ)——方法論を中心に——』、島田・松田・大坪;1985)に詳しく述べているので、ここでは社会的発達に関する質問項目についてのみ、その概略を以下に説明する。

社会的項目は、接触(社交性)、依存(利用)、愛情(同情・好意・親切)、支配(指導・命令)、従順(協調)、拒否(抵抗・敵意・からかい)、競争(自慢)、模倣、責任を負う(規則を守る)、自律性(自我意識)といった合計10個の領域から構成されているが、この各領域の質問項目はさらに、対大人関係、対子ども関係に分けられている(最後の2つの領域では、子どもと大人を含んだ全般的な対人関係が問われているので例外)。質問の項目数は領域によってまちまちであるが、全体では大項目(その領域に関する全般的な傾向を問う項目で、各領域とも対大人関係で1個、対子ども関係で1個設けてある)が18個、小項目(具体的な問題や場面における傾向を問う項目で、対大人関係、対子ども関係に数個ずつ設けてある)が101個の、合計119個である。

本調査の一つの大きな特色は、一人ひとりの園児に関する各質問に対して、担任の教師と親の両者から回答を求めた事である。回答の方法は、「いつも」、「ときどき」、「ほとんどない」の3件法によった。

結果および考察

全体的な結果については、次の大坪らの論文(『幼児の社会的・感情的発達に関する研究(Ⅲ)——感情的発達を中心に——』、大坪・島田・松田;1985)の末尾に一括して掲載しているので、ここでは各領域での顕著な結果や、注目すべき反応が得られた項目についてのみとりあげ、考察を加えていくことにする。

ただし、結果の解釈にあたっては次の点を十分に留意しておく必要がある。それは、子どもが園において出会う大人や子どもと、園以外の親の目に触れるような場面で出会うそれとは、いろんな面から等質だとは言えない点である。たとえば、子どもが園で出会う大人といえば、たいていの場合が保育士・教師に限られているが、後者の場合では、家族や親戚の大人とか、顔なじみの近所の大人など範囲が広く、質的にもいろんなものを含んでいる。対子ども関係についても同様である。したがって、同じ質問項目であっても、そこで問題にされているような態度や行動を子どもが園でとった場合と、家庭などの園以外の場所でとった場合とではその意味が異なってくることも考えられるので、同一項目についての保育士・教師の回答と親の回答を単純に同次元で比較し、論じるわけにはいかない場合もある。

1. 接触(社交性)

幼児が自分の家族以外の者との接触を試みる場合には、そこにいくつかの大まかな段階を見るこ

とができる。

① 興味や関心を抱いた相手に対して遠くからながめたり、近くまで寄ってはみるが、なんら直接的な働きかけや交渉をもととしない段階。

② 控え目ながら、その人の身体に触れたり押ししたり相手の反応を見ようとする。あるいは奇抜な言動で相手の注意を引こうとする段階。

③ 相手と実質的な交渉を持つ。つまり、ある活動を共有しようとして相手に話しかけたり、意味のある活動を展開しようとする段階。

④ 相手への働きかけが質・量ともに向上し、より深い特に親しい関係を作ろうとする段階。

具体的な場面で、子どもがどの段階の行動をとるかによって、大まかながらその相手との対人関係の深さを知ることができる。

(1) 対大人関係

まず、全般的な傾向を大項目の結果からみてみると、大人への接触の仕方の発達的变化が、園の評価と親の評価では、まったく違った形で現われることがわかる。園の評価では、大人（保育・教師）への子どもの接触は、3歳児を除けば、年齢と共に「いつも」接触している傾向が徐々に増えてくるのに対して、親の評価では反対に年齢と共に減少していく傾向を示している（図-1）。そして、これと全く同じ現象が小項目の中にもいくつか見られる。

小項目への反応を前述した大まかな4つの段階分けに従って見ていくと、①の段階である「大人

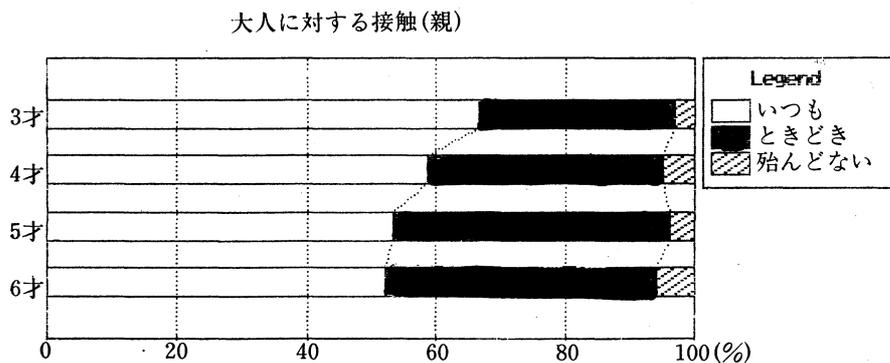
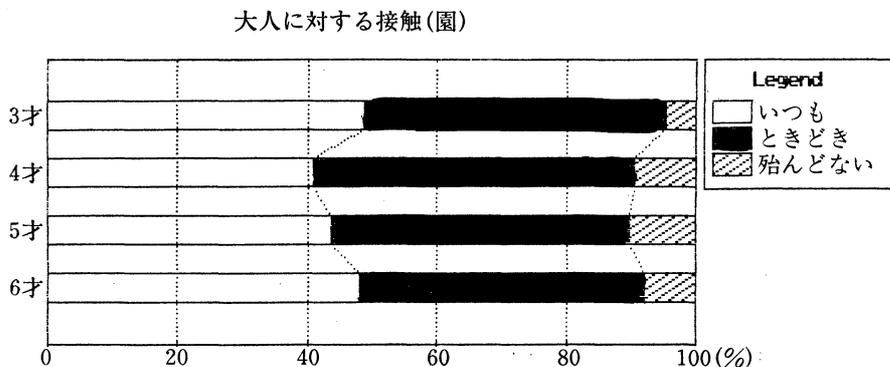


図-1 大人に対する接触

の方へ近づきだけ、そばに立つだけ」の項目では、園と親の評価には目立った差はみられない。特に園での評価では発達的な変化もみられない。

次の②の段階に相当する「大人にさわったり、押したりする」、「大人の注意をひくため、派手にふるまう」、「大人の注意をひくため、いたずらをする」の3項目では、園での評価でも親の評価でも「いつも」とか「ときどき」への反応は年齢が進むにつれて減少し、「ほとんどない」が増加する傾向がみられる。

ところが、③の段階にあたる「大人に声をかける」とか「大人に何かを見せる」、「大人に話しかけてくる」の3項目では、大項目におけるのとほとんど同じ反応パターンが現われている。つまり園では、3歳児を除けば、「いつも」が年齢が進むにつれて増大するのに、親の評価では逆に減少するのである。もっとも、「ときどき」と「いつも」の2つの反応を合わせれば、園でも親でも、どの項目においても90%前後を占めてほぼ似たようなパターンを示す。

発達的に考えた場合、一般的には③よりも②の方が前の段階であると考えられるが、「いつも」とか「ときどき」が②より③で多いのは、すでに3歳以降になれば、他者とのかかわり方の主流が②よりも③に移っているためではないかと思われる。しかし、③に相当する行為が園の評価では年齢の上昇につれて増加しているのに対し、親の評価では逆に減少しているのはどうしてだろうか。

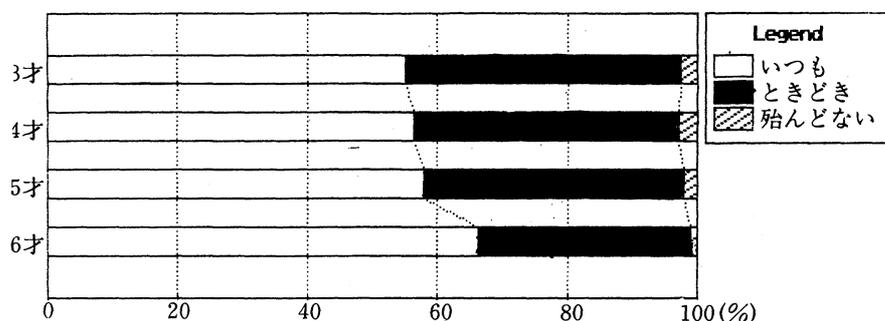
(2) 対子ども関係

大項目で一般的な傾向を見てみると(図-2)、4歳と5歳に対する親の評価で、「いつも」への反応が、3歳・6歳に比べて10%程度落ち込んでいる点が目につくが、「いつも」と「ときどき」の反応を合わせると、どの年齢群でも100%近くになり殆んど差は見られなくなる。この点は園の評価でも同様である。園の評価では、親の場合と比較すると、はっきりとした発達的な推移が読み取れる。子どもの年齢の上昇につれて、「いつも」への反応が増え、「ほとんどない」への反応は、3歳の時点から割合としては低かったものの確実に減少しており、子どもが園での集団活動になじみながら交友関係を発展させていく様子がよくうかがえる。

前述の4段階を念頭に置きながら小項目を見てみると、①に相当する「他の子どもの方に近づきだけ、そばに立つだけ」とか「子どもたちのグループの外にいる」、「他の子どもの遊びをじっと見ている」という項目や、②に相当する「他の子にさわったり、押したりする」という項目では、園の評価でも親の評価でも、子どもの年齢と共に「ほとんどない」が増加し、③に相当する「他の子どもに声をかけたり話をする」や「他の子どもに何かを見せる」の項目では、なぜか親の評価では発達的な変化が見られてないが、園の評価では「いつも」が明確な増加傾向を示している。この他、「他の子どもとよく遊ぶ」とか「特別に親しい友だちがいる」の項目では、園でも親でも、子どもの年齢とともに「いつも」が増加し、「ほとんどない」が減少するという傾向をはっきりと示し、接触(社交性)領域における質的な発達をよく物語っている。

対子ども関係を見た場合、親の評価よりも園での評価の方が、よりスムーズな発達が示されているようである。ただ、対大人関係においても対子ども関係においても、③の段階が園での評価では

子どもに対する接触(園)



子どもに対する接触(親)

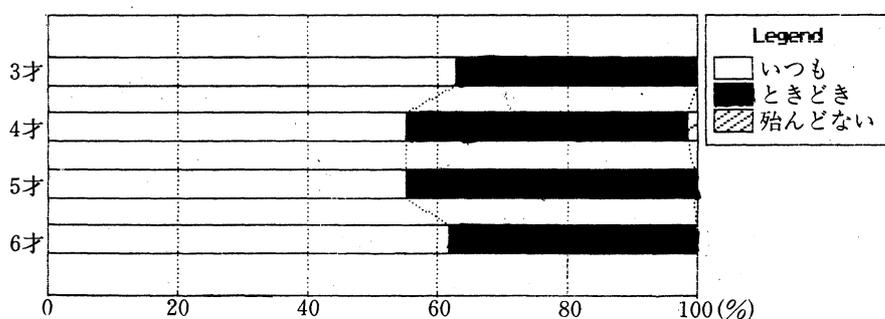


図-2 子どもに対する接触

子どもの年齢の上昇につれて増加しているのに対して、親の評価では停滞ないしは減少している点が気になる。②の段階での行動はさわったり、押したり、派手な言動をとったりするので、現象的には目につきやすいが、③は一般に安定し落ちついた行為である事が多いため、観察や評価の不慣れた親には見過ごされがちであったり、あるいはその価値が過小評価されがちになる事も理由の一つとして考えられるかも知れない。

2. 依存(利用)

(1) 対大人関係

大項目への反応で、大人に対する子どもの依存的態度の全般的な傾向をみてみると、園における保育や教師の評価と園以外での親の評価には、かなりの差がある。図-3をみると、「いつも」という反応では園と親の間にはほとんど差がないが、「殆んどない」という反応は園の方が親よりも高く、年齢とともにこの差は広がっている。つまり、保育や教師は親よりも高い比率で、子どもの大人に対する依存的な態度を否定しているのである。

これには2通りの解釈が考えられる。まず第1には、子どもの態度が園の中と外で実際に異なっており、公的な場面である園では自律的に、私的な場面である家を中心とした生活空間ではより依存的に行動しているという解釈である。第2は、保育・教師の評価基準が親のそれと異なっており、前者は年齢層の異なった大勢の子どもを比較の対象とし得るために客観的で確かな評価が可能であるが、一方そういったしっかりした比較基準をもたない後者は主観的で近視眼的な評価しかできない

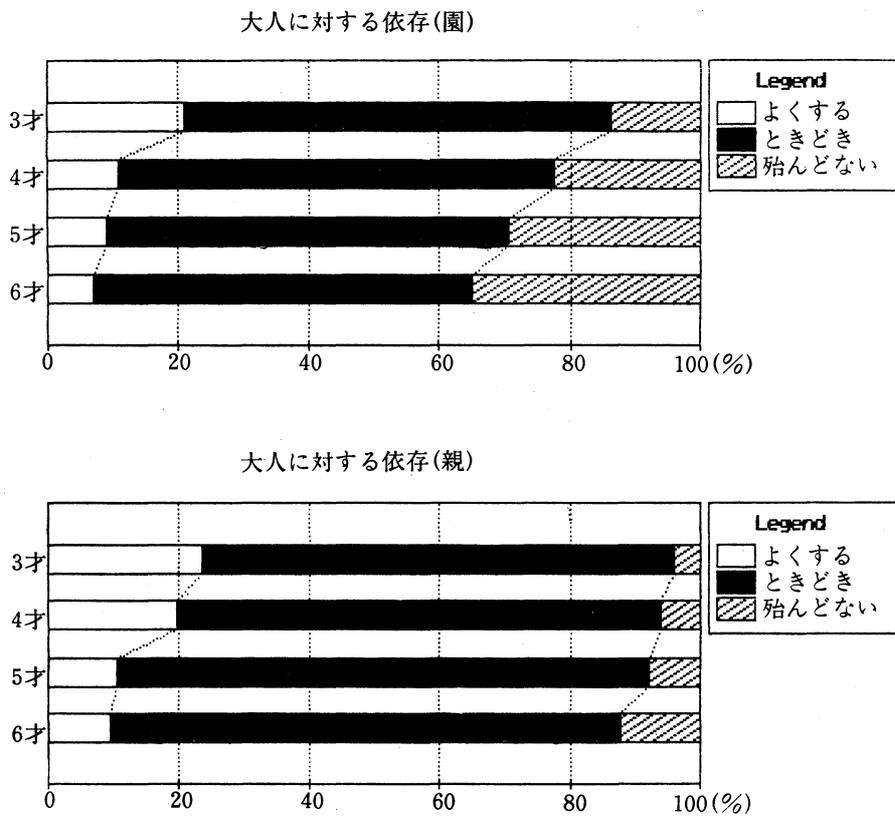


図-3 大人に対する依存

いために生じた差であるという解釈である。

図-3に示された反応からだけでは、どちらの解釈が正しいかを判断するのは困難だが、後に述べる、対子ども関係の大項目(図-5)や、その他の小項目の結果と比較してみると、ある程度の推測が可能である。つまり、他の子どもに対するその子の依存的行動の評価では、園と親の間には大きな差は見られない。このことからすると、図-3の評価のズレは、評価者に起因するよりも子どもの実際の行動の差に起因する部分が多いことが示唆される。

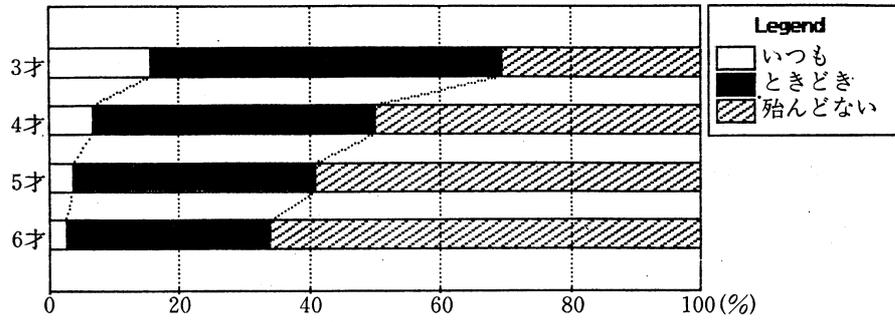
対大人関係の具体的な小項目においても、ほとんどが大項目と同じ傾向を示し、親の評価よりも園の評価において子どもの依存的態度は低く現われ、しかもその差は子どもの年齢の上昇とともに大きくなる。その典型的な例として、「大人に甘えてなぐさめてもらう」という項目についての園と親の評価を図-4に示すが、この項目では園と親の評価の一致係数は0.44、サイン検定の結果、親よりも園の方が子どもを依存的でないと評価する傾向が有意($CR=23.92, P<0.01$)に高いことがわかった。子どもは、園での大人(保母・教師)関係では園以外での(主として家での)甘えや依存を随分と抑制している姿がよく現われていると思われる。

(2) 対子ども関係

他の子どもに対する依存傾向は、大人に対する依存傾向ほど園と親の評価に差がみられない。まず、全般的な傾向を大項目の結果からみてみると図-5のようになっている。

少し前に述べたように、この項目に対する評価では、園と親の間にほとんど差がみられない。ま

大人にあまえて、なぐさめてもらう(園)



大人にあまえて、なぐさめてもらう(親)

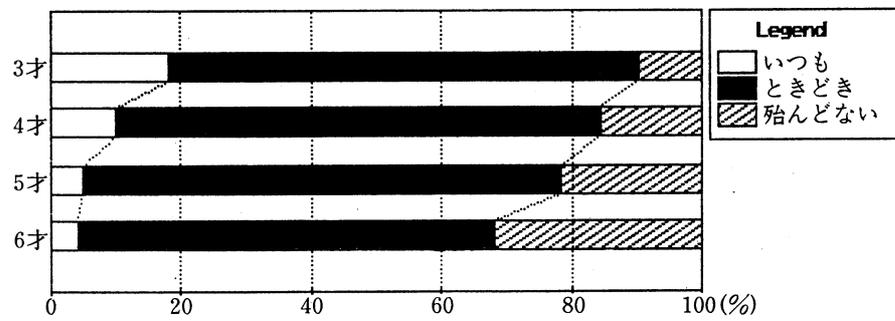
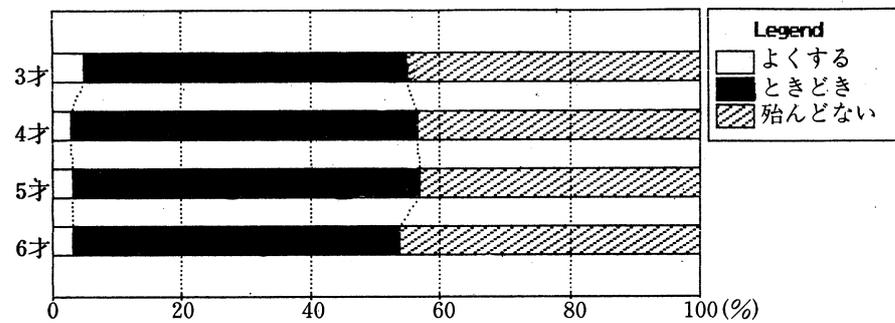


図-4 大人に甘えてなぐさめてもらう

子どもに対する依存(園)



子どもに対する依存(親)

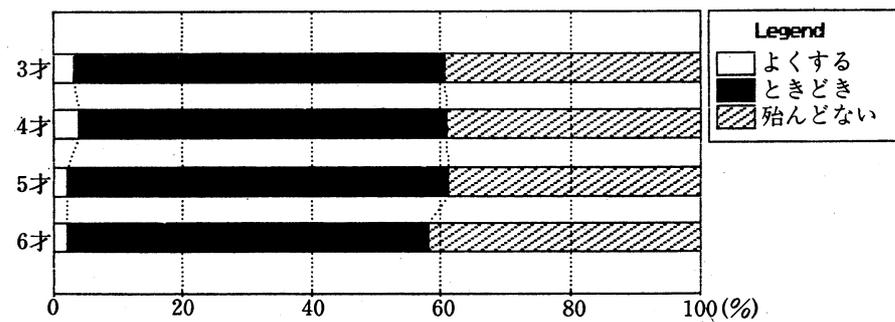
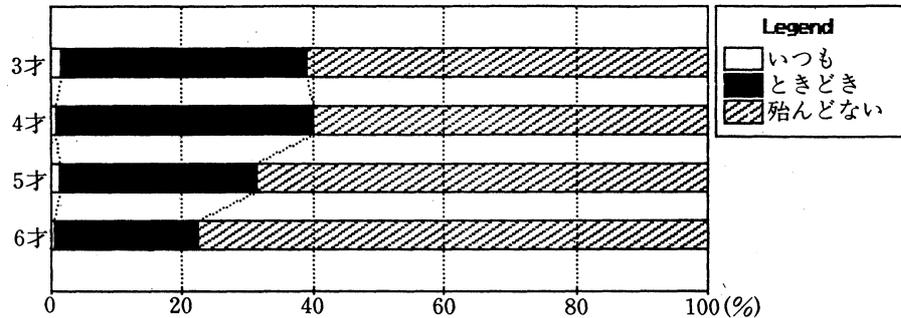


図-5 子どもに対する依存

他の子に道具の扱いを手伝ってもらう(園)



他の子に道具の扱いを手伝ってもらう(親)

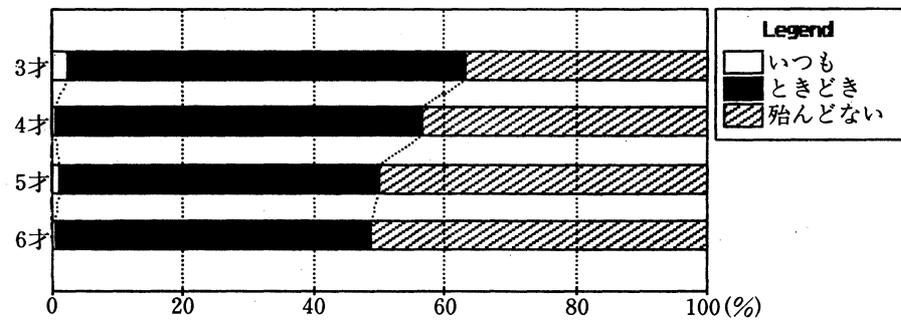


図-6 他の子に道具、遊具の扱いを手伝ってもらう

た、この項目では、園の評価においても親の評価においても発達的な変化がまったく現われていないが、これも珍しい特徴である。

具体的な小項目においても、だいたい同じような傾向が認められる。そんな中で、「他の子に道具、遊具の扱いを手伝ってもらう」という項目では、園と親の評価の間にはっきりとした差が見られる(図-6)。これは恐らく、園での子どもの活動場面では、親の目に触れる活動場面におけるよりも道具や遊具を用いる機会が多く、また、その際に周囲の者が手を貸してやるのではなく、自分で対処するような指導や雰囲気を作られているためであろう。

3. 愛情((同情・好意・親切))

(1) 対大人関係

図-7は対大人関係における愛情的態度の全般的傾向を示した大項目の結果であるが、園と親の評価では随分と大きな差が現われている。園と親との判断の一致係数は0.495で、2,982人の園児に対して園の保育・教師と親とが同じ段階の評価をしたケースが1,477あったが、残りの1,505ケースのうち、大人に対する子どもの愛情的行為や態度を親の評価よりも園の保育・教師が低く評価したのが1,245ケースであり、園の方が親よりもはっきりと厳しい評価をしている(サイン検定 $CR=25.36, P<0.01$)。

具体的な小項目においても、上述の大項目とほぼ同じような結果が得られている。ただ、園での評価では、子どもの年齢の上昇とともに愛情的態度も徐々に増加する傾向が見られるのに対して、

